

国連NGO横浜国際人権センター・うずしおランチ T-over人権教育研究所・人権こども塾ニュース

人の世に熱あれ 人間に光あれ⑤ ～部落に対するマイナスイメージしか残らない人権学習～

部落問題の本質を学ぶ語り合いの人権学習に

部落問題を語り合い仲間の思いや訴えをまとめるように、部落出身のM・Mが部落問題学習に寄せる思いを切々と語っていく。その発言は初めて部落出身を自覚したときの思いと、本心をさらけ出す部落問題学習の重要性を訴えた語りである。

部落に対するマイナスのイメージしか教えてもらわなかった部落問題学習

「涙を流すことではなく、自分が部落に生まれたということを誇りに思うことによって、この学習は人間としての本当のよろこびをつかんでいくことができるし、より人間としてすばらしい生き方を求めて頑張ることができるから、もっともっと早い時期に自分自身が人間らしく生きるためにこの学習を捉えて、一生懸命にこの学習に取り組むことができたら、もっともっと自分自身は成長していただろうし、もっと早く変われたと思うんです。

小学校の頃や中学校1年生のときだったら、僕自身真面目に取り組むこともなかったし、授業を真剣にする姿勢も周りになかったし、何かうわべだけで終わっていたような授業だって、絶対何も進歩のない授業だったと思うんです。でも中学2年生から頑張ってきた今の自分を見ていると、すばらしく進歩することができたと思います。僕は僕自身が部落に生まれたと知ったとき、ものすごいショックが僕の中に沸き起こってきたんです。

それはそれまでに部落のことなんかを小学校の高学年頃から教えられていたけど、部落の悪いイメージだけしか心の中になくて、とにかく部落というところは差別されて惨めなものとしてしか授業で教えてもらってなかったから、あんなショックがあったんだと思うんです。今考えてみると部落に対するマイナスのイメージしか教えてもらわなかったからそうなったと思えてくるんです。でも今はマイナスをプラスに変えるというか、自分をより大きく成長させていくことを教えてもらっているように思います。

やっぱり小学校のときにもちゃんと学習して、中学校1年生のときにももっとちゃんと学習していたら、こういうショックも受けなかったと思うし、今僕たちが続けてきたような学習をもっと昔から続けていたら、部落差別というものはもっともっと小さいものになっていたと思うんです。ただ時間をこなすうわべだけの授業だったら、絶対この先なんぼ部落問題の授業をやっても、やったというだけで生徒の中には、部落問題を部落という惨めなところに生まれた人の問題としてしか捉えられない授業となって、本当の意味で差別をなくしていく授業にはならないと思うんです。

僕たちが中学2年からやってきた本音の部落問題学習をこれから先も大切にして、絶対部落差別をなくしていかなければならないし、大きくなって絶対差別者にならないようにしていかなければいけないと思います。」

生徒と教師が一体となり、生徒の思いと語り合いがつくっていく授業

授業は、生徒の発言が続き、50分が瞬く間に過ぎていく。かつて、一方的に語り続けた私の授業は、生徒たちにとっては退屈で、まだ終わらんのかという授業であった。しかし、生徒が主体となり、一人ひとりが思いを語り、受け止め、語り合う授業は、瞬く間に時間が過ぎていった。

生徒と教師が一体となり、生徒たち一人ひとりが語り合いつづけていったこの公開授業は、人間としての生き方を求めていく道徳学習や人権・部落問題学習のひとつの成果として、私にとって希求すべき姿だと思った。

写真は1991年11月19日 第21回徳島県中学校同和教育研究大会(板野中学校3年B組公開授業)

本気の人権学習は、——「すべてを変える」 うずしおランチ共同代表 森口 健司